

もしここに硬い大きな壁があり、そこにぶつかって割れる卵があったとしたら、私は常に卵の側に立ちます。

2月15日 作家村上春樹は、イスラエルでのエルサレム賞の受賞スピーチでこんな比喻をつかいイスラエルを批判しました。私たちの住む平和な日本の裏側では今も理不尽な民族間の対立・殺戮行為が続いています。ユダヤとアラブのお互いを相容れることが出来ない長い長い確執イスラエルとパレスチナの民族的な対立思想は、私たちには簡単に理解ができないところにあるようです。世界の人々が、国連の仲介が、何度も和平を試みますが悲劇は繰り返されています。

今回村上氏が受賞したのは、「社会における個人の自由」への貢献を讃えるというイスラエル最高の文学賞。罪無き民パレスチナ民間人、子女の多くを虐殺しておきながら、なにが社会における個人の自由か、イスラエルに個人の自由を言う資格は無い、村上氏はこの賞を辞退すべきだとの声があがりました。

しかし、村上氏は敢えて参加しました。そして受賞スピーチをしました。巧みな言葉まわし、比喻を交えて現政策・体制を批判しました。全文は紹介できませんが、要点のみ切り抜いて紹介します。遠い国の、理解が困難な問題ですが、同じ地球の、同じ人間の苦難を少しでも知り考えて見ることにします。

これまでに千人を超える人々が封鎖された都市の中で命を落としました。国連の発表によれば、その多くが子供や老人といった非武装の市民です。私自身、受賞の知らせを受けて以来、何度も自らに問いかけました。この時期にイスラエルを訪れ、受けることが果たして妥当な行為なのかと。それは紛争の一方の当事者である、圧倒的に優位な軍勢力を保持し、その方針を是認するという印象を人々に与えるのではないかと

爆撃機や戦車やロケット弾や白燐弾や機関銃は硬く大きな壁です。それらに潰され焼かれ貫かれる非武装市民は卵です。しかしそれだけではありません。そこにはより深い意味もあります。こう考えて見て下さい。我々は皆多かれ少なかれ、かけがえの無い一つの魂と、それをくるむ脆い殻を持った卵なのだと、私もそうだし、あなた

方もそうです。そして我々は皆多かれ少なかれ、それぞれにとっての硬い大きな壁に直面しているのです。その壁は名前を持っています。それはシステムと呼ばれています。そのシステムは本来は我々を護るべきはずのものです。しかし、あるときにそれが独り立ちして我々を殺し、我々に人を殺させるのです

国籍や人種や宗教を超えて、我々は皆一人一人の人間です。システムという強固な壁を前にした、一つ一つの卵です。我々にはとても勝ち目は無いように見えます。壁はあまりにも高く硬く、そして冷ややかです。もし我々に勝ち目のようなものがあるとしたら、それは我々が自らの、そしてお互いの魂のかけがえのなさを信じ、その温かみを寄せ合わせることから生まれてくるものでしかありません。考えてみて下さい。我々の一人一人には手に取ることの出来る生きた魂があります。システムにはそれがありません。システムに我々を利用させてはなりません。システムを独り立ちさせてはなりません。システムが我々を作ったのではありません。我々がシステムを作ったのです



景気対策か選挙対策か

景気対策の名の下に次々と打ち出される財政出動、非常事態の緊急出動は誰しもが望み、どこからも文句が付けられない。赤字国債の上限なんてものはこの際には無用のものの。100年に一度の大不況に立ち向かうには、とにかくお金をバラマキ、消費を喚起し景気を浮揚させるのだ。

消費者(有権者)に分かり易い定額給付金の愚策にはじまり、高速料金の1000円均一の愚策、エコカー購入助成金、省エネ家電エコポイント、まだまだ追加経済対策として何を考え出してくれるのか、消費者にとってはありがたい施策で「ワッショイ、ワッショイ」の掛け声と手拍子をうって大歓迎をしよう。お金持ちの皆さん！いまこそ使うときですよ。ワッショイワッショイあるだけ使って景気を良くしましょう。

貧乏人の私は皆さんと一緒にワッショイするわけにはまいりません。ひがみ根性のまなざしで皆さんのお祭りを見物させていただきます。



4月4日しんせいプラザに於いて、花見会を開催

宴の前に、心地よいさくら日和のなかを健脚者のみが荒子村から庄内川を跨ぎ、前田村までハイキングを行いました。両方の村とも、前田利家公の生誕地として、荒子城址・前田城址として紹介しています。

なにしろ470年も前のことで、真偽のほどはよく分かりませんが、犬千代が7歳の1年坊主のとき、父親が前田城をはらい、荒子に築城をしたことから移り住んだという説もあります。自然一杯の野畑のなかを、末に槍の又左衛門 前田利家となった犬千代のガキ大将が飛び回った地なんですね。(写真は前田城址)